

江北の四季

令和3年
1月18日
第41号



寒さで波しぶきを浴びた湖岸の枯れ草が氷結しました。

○大寒(だいかん)
一月二十日から立春の前日の節分までが大寒です。ちなみに節分とは立春・立夏・立秋・立冬の前日を指し、四季を分ける日のことです。大寒は二十四節気の最後の節気です。この時季の水を「寒の水」といい、気温や湿度が低く雑菌が少ないので、以前は我が家でも大寒の日をめぐりに一年分の味噌の仕込みをしていました。現在では以前ほど味噌を消費しな

いことと、減塩が盛んに言われるので、市販品を使うようになってしまいました。餅つきだけは、蒸す・つくという便利な機械を使っただけで済ませてしまっていますが、一月の味噌つきはしなくなり、寂しいものがあります。そういえば、冬のおやつであるかき餅を火鉢で焼かなくなると、もう何十年も経ってしまいました。今年のように雪が降って家に閉じ込められると、醤油につけては火鉢の五徳で焼いていた子供の頃が無性に懐かしくなります。歳のせいかもしれません。



土手の草をかき分けると露の茎が出てきました。

大寒は寒さが極まる時季ですが、同時に、春がじわじわと近づいてくる時季でもあります。寒い日の合間に暖かい日があると、つい「三寒四温」という言葉が出てきます。三日寒くて四日温かい日が続くことです。実際にそうなるのは、二月末頃から三月頃ですが、この時季に、期待を込めて使ってしまいます。歳時記を見ると、初春ではなく冬の季語に入っているのです、やはり人はこの時季にこそ使いたいのだと思います。

○第七十候、大寒の初候は、款冬華(ふきの)はななく(ふきの)とうかおをだす(す)です。

款冬は露の(ふきの)ことだそうですから、「落華(ふきはな)咲く」なんですね。しかしいくら何でもこの時季に花は咲きません。川の土手を探すと、草の下に露の(とう)茎が見つかりました。この露の(とう)茎は一月末から二月頃に中の花芽が顔を出し、二月末から三月頃に花を咲かせます。七十二候の作者は、きつともうすぐ春が来る事への期待と希望を込めて、露の(とう)茎が顔を出すことを「華」といったのでしようか。

なお、フキの名の由来は、冬に黄色い花をつけるので「冬黄(ふゆき)」が縮まったからとか。



紫木蓮の芽

○春の皿には苦味を盛れ

路の臺は春を感じる一番のご馳走です。これを根元から切り取り、水を入れた茶飲み茶碗に入れて、食卓に置いておきます。朝食のとき、外側の葉を少し手でちぎり取り、味噌汁に浮かべていただきます。その独特の香りとほろ苦さを味わいながら、そこまで来て春の訪れを楽しみに待つことができます。もちろん、天ぷらや路味噌にしてもいいのですが、この方法が一番手軽に毎日「春の使者」を味わえます。

春野菜特有の苦みは、植物性アルカロイドという成分で、冬ごもり用となった代謝機能の低下を改善し、春用の活動的な体に再生してくれます。冒頭のことわざはそんなところから来ているようです。明治時代の医師で食育の重要性を説いた石塚左玄も「春苦味、夏は酢の物、秋辛味、冬は油と合点して食べ」と言っています。我が家の春への準備運動は菜花(菜の花)のお浸しと路の臺の味噌汁です。

☆蛇足

フキの名の由来にはもう一つの説があり、大昔は柔らかいフキの葉っぱをトイレトペーパーの代わりに使っていたからとか。つまり、路の臺は「拭きのとう」なのです。はっ……、これは知らない方がよかったです。



サンシュユ(山茱萸)



ウメ(梅)



レンギョウ(連翹)



コブシ(辛夷)

○冬萌(ふゆもえ)

冬の季語で、暖かい日に木の芽や草の芽が出てくること、あるいは日だまりにいち早く芽を出している様子を言います。冬芽(ふゆめ)と言うときもありです。実際には、春に萌え出す芽は秋の内にできていますが、落葉樹の葉が落ち尽くした枝にある芽は、晩冬になると春への期待と共に目立ってきます。

○探梅(たんばい) 梅探る(うめさぐる)

私は俳句はだめですが、季語を知ると、季節の変化のなきそうなどきでも、ときの移ろいに気づき生活を彩るように思います。探梅とまではいきませんが、それこそ庭の梅の木を三日に一度は見上げて、花はいつ咲くかなと楽しみに待つのは心うきうきするものです。

花屋さんが届けてくれる花材には、早くも花の咲いた梅や桜が入っています。これを生けるのも楽しいひとときですが、やっとほころび始めた梅の一枝を手にとっていけるときの気持ちはかけがえがありません。

昨年、知り合いのお寺さんから立ち枯れた梅の苔木をいただいたので、先日待ちに待った梅と取り合わせてみました。やっと苔木を生かすことができ嬉しきひとしおです。(花は二月のHPに載せていただきます。)



生花正風体(三種生)

ボケ(木瓜)、菜の花、谷渡り
楽々教室での初生けです。

